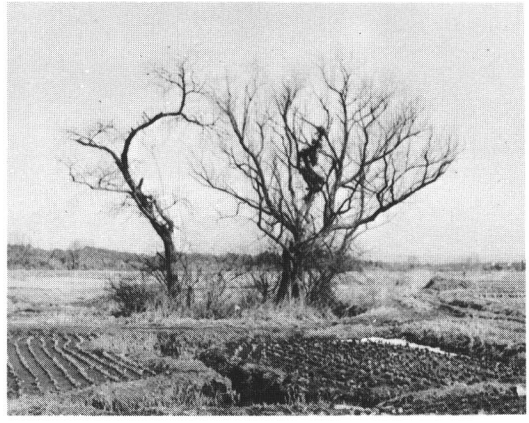
る不思議さ夫を慕う心の切なさは、鳥すらかくの如し。ましてや人と生まれ、かかる殺生を業とするは人にあるまじき事を」、と忽ち発心して、菩提を弔うと、野刀で自分の黒髪を切り捨てた。そして一つの悟りを得たので、名を「一覚」と改めて、法燈国師の門に入り、修業を続けた。

のちに、沼の傍に鴛鴦院六角山延命寺という寺を建てて、おしどりの霊と六親九族有縁無縁の冥福を祈ったという。

ある夜、夢にまたおしどりの夫婦が現れて、僧に、「我等夫婦図らすもおし鳥と生まれ、丈夫に射殺された時は、愛別離苦生死の悲を起して怨んだが、今は貴僧の読経供養にあずかり、五水三熱の苦患を忘れ、本覚成仏を得たり、吾ら生前の栖は星より南なる女神山の麓なれば、我等の精霊は、永くその山のほとりに止って近隣の人々を守る男女の神となるらん、貴僧ねがわくば、延命寺を我がもとの栖なる閑清の所に移して、安く生を養い、命を易くして不老をとげ給え」、と言って消えた。



阿曽沼

翌朝、枕のほとりに、二つの羽根に二首の歌があった。

常ならぬ風にちりにし花も今

御法の雨に実を結びける。